恋々加留多　鼠小僧

起て万国の整風チェーン！

平民階級が花

演劇センター68／71

スタッフ

作・演出	佐藤　信
美術	平野甲賀
照明	秋本道男
音楽	みやま・まさや 菊地雅章
振付	広瀬元美
殺陣	国井正広
衣裳	藪　和彦
舞台監督	大槻哲郎
演出助手	堀田正彦
制作	山元清多

キャスト

もみじ	新井　純
きく	島田孝子
ぼたん	山口美也子
ジェニー一条	緑　魔子
むかしの鼠小僧	樋浦勉・清水紘治
リーヤ	村松克己
ハムレット	金子研三
オセロー	小篠一成
マクベス	溝口舜亮
シェークスピア	加藤　直
前衛坊主	伊川東吾
後衛坊主	根本和史
紙猫屋	斉藤晴彦
追い桜	福原一臣
追いれ松	服部良次
ニス雨	中村方隆

次郎吉

本部企画

の御奉公！

5月29・30日　PM7:00

黒テント整風興行

中庭

ぼくらが，67・68年頃に見据えていた歴史のダイナミズムを軸とする曲線は，〈60年〉を始点とし〈70年〉を一応の頂点とするS字型の上昇曲線であった。ぼくらは当時右目で〈60年〉の挫折を補捉しながら，左の目で来るべき〈70年〉の勝利を見据えていた。しかし，現在のぼくらの視座から見据える〈幻の日本革命〉に向う曲線は，〈70年〉を最低部の始点として上昇への予感を孕む曲線である。ところで，わたしは先ほどからぼくらという言葉を不用意に使っているが，ここでいうぼくらとは，まさに「鼠小僧次郎吉」に登場する人達――不幸を現状のままに維持することを強いる秩序の体系の中で鼠小僧をヒーローとして待ち望む健全な民衆――であるのだ。話を元に戻そう。〈70年〉を定点として，かつての曲線と現在の曲線の座標を測った時，ぼくらは完全に非連続な二つの曲線を見出す。同時にぼくらは，無規定的な日常性の連続の中で〈70年〉という定点上の決定的な非連続を，抑圧された想像力の部分で連続させている自身を見出す。民衆のこの非連続的連続を包摂する歴史軸の定点は〈70年〉であったばかりでなく，時には〈天皇〉であり，〈終戦〉であり，〈60年〉であったのだ。ぼくらは，通時的な日本の歴史軸上の様々なレンヂに，この非連続的連続を共時性として指摘することができる。

『鼠小僧次郎吉』は，敵が歴史を上昇する直線として，（未来学だとか進歩の論理とか組織論ということばで）単線的に語ることに対して，民衆のこの『幻の日本革命に向う非連続的連続を』夢の脈絡において語ろうとする試みなのである。"生活を変えたい"と素朴に願かけをする民衆の心情が，墨黒々とした「子之刻参上！」という不吉な言葉を秩序の御神体に貼りつけ義賊鼠小僧を登場させるのだ。闇装束の鼠小僧が，花の大江戸から焼跡の青空市場や新宿三丁目辺のストリップ小屋へと神出鬼没するのは，「子之刻参上！」から「子之刻五分過ぎ」へという。歴史軸上の一定点における一瞬の非連続的連続の暗黒が，待ち望む者達を当の待ち望まれていた者へと変身させるからなのだ。鼠小僧への民衆の変身こそ「幻の日本革命」を共時的に存在せしめる歴史のダイナニズムなのだ。

何を隠そう，鼠小僧次郎吉とはぼくらなのだ。

『鼠小僧次郎吉』は，69年10月から8ヶ月にわたったレパートリーシアターの試み中で，三度にわたって改作され，今回の移動黒テント整風興業のために四度全く新たに書き改められた作品である。なお，作；演出の佐藤信はこの作品によって70年度の岸田戯曲賞を受賞している。